

コラム 関門トンネル開通時の公募歌

歌詞公募によって軍歌がつけられるのは日清戦争に始まったことであり¹、1937年に日中全面戦争が始まると近衛内閣が「国民精神総動員運動」を推進し、国民を戦争協力へ駆り立てるが、その一環として公募歌募集や軍歌の選定が積極的に行われるようになった²。さらに、このような公募歌については、メディア間の競争もあり懸賞金が高騰し、応募が殺到することとなった³。

1942年、太平洋戦争のさなかに関門トンネルが開通した。これは本州と九州がわずかに十分足らずの鉄路で結ばれたことを意味しており、日本国民が挙げて待ち望んでいた社会基盤整備の達成であった⁴といえ、それを記念して、上記のような公募歌の流れをくむ形になる朝日新聞主催の「躍進鉄道歌」の公募が行われた。前文には、

「顧みれば明治五年、新橋、横浜間に初めて鉄道が敷設せられて満七十年、意義深くもこの年この聖戦下関門海底鉄道隧道は世界注視の裏にいよいよ開通し、東亜共栄圏において日本を盟主とする鉄道永遠の躍進はここに力強くも約束されるに至つた、鉄道省および本社はこの機に際し雄渾明朗なる歌曲をもつてこの大事業を永久に記念し、鉄道輸送に対する国民の協力心をより一層交流振起するため、左記規定により『躍進鉄道歌』を募集することになった、奮つて力作を寄せられんことを」⁵

とあり、内容については、「前期の趣旨に副ひ、かつ行進集会をはじめあらゆる勤労作業等の場合に広く唱和し得るもの、章節は三節あるひは四節、歌詞のみにて可」⁶と規定されている。

この公募の結果、次のような「みくにの汽車(躍進鉄道歌)」、「海の底さへ汽車は行く」の2曲がつけられた。

¹ 小村公次(2011)『徹底検証 日本の軍歌』学習の友社,p.122

² 同上,p.125-126

³ 辻田真佐憲(2014)『日本の軍歌』幻冬舎新書,p.174

⁴ 田村喜子(1992)『関門とんねる物語』,毎日新聞社,p.178

⁵ 『朝日新聞』1942年9月19日

⁶ 同上

○「みくにの汽車(躍進鉄道歌)」⁷

詞 橋本竹虎
曲 山本芳樹

1. 窓に富士山青い空 みくにの汽車は昼も夜も
あの野この原越えて行く 明治の代かやすみなく
いまは三万五千キロ
2. 雨、風、霧を突切つて いくさの中へまつしぐら
兵隊さんや砲戦車 どしどし送るたくましい
汽車の手柄は殊勲甲
3. 見事出来たぞ関門の つなぐトンネル海の底
聞くも楽しい素晴らしい 弾丸列車走らせて
行つてみたいなどこまでも
4. 時間正しく親切な 御国の汽車は世界一
広い南の国々に みのるバナナや椰子の実を
やがて運んでくれるだろ

○「海の底さへ汽車は行く」⁸

詞 坂本正雄
曲 大久保徳二郎

1. 世紀の誉だ 雲に鳴る 汽笛の音もたからかに
あげた勲だ日本の 誇だ御国の大鉄路
※(すめらみ民の血に燃えて 海の底さへ汽車は行く)
2. 銃後も戦だ汗みどろ きつと勝ち抜く意気込みに
そえる誠だ新鋭の 兵器だ轟くこの車輪
※繰り返し
3. アジヤは夜明けだまつしぐら 進む先駆の日の丸に
おくる光だ百万の 見方だ我らの輸送陣
※繰り返し

⁷ 『朝日新聞』1942年11月5日

⁸ 同上

まず、歌詞については、「御国の汽車は昼も夜も(略)明治の代から休みなく今は三万五千キロ」、「時間正しく親切な御国の汽車は世界一」、「日本の誇りだ御国の大鉄路」といって日本の鉄道網を称賛し、「兵隊さんや砲戦車どしどし送るたくましい汽車の手柄は殊勲甲」、「新鋭の兵器だ轟くこの車輪」といって鉄道が軍事上重要なインフラであることを印象付けたうえで、「見事出来たぞ関門を繋ぐトンネル海の底」、「海の底さへ汽車は行く」と関門トンネルの開通を誇示している。このことから、この2曲は、関門トンネルの開通を自国の鉄道網への誇りをかきたて、戦争遂行のうえで大変有意義でおめでたい出来事として観念させる効果を持っていたといえる。

また、歌詞は七五調の文体でできており、これは覚えやすく、替え歌も容易で、作詞の素養のない一般国民でもパズル感覚で作りやすかった⁹ので、公募歌の歌詞にはうってつけであったのかもしれない。

両曲とも付点八分音符と十六分音符の組み合わせでできる「ぴょんこ節」といわれるリズム¹⁰でできている。これについて團伊玖磨は、「ラッタ・ラッタ(ピョンコ・ピョンコ)という調子のいい音型が繰り返されることからつけられた名称で、わかりやすく覚えやすいため人々はこれに飛びつきました」¹¹、また明治二十年以降これが多用されたことについて、「日清戦争に勝利した高揚感、国民としての誇らしさが、軽快に手を振って歩くという行動と結びついて、人々の心をとらえた」¹²と説明している。

当時の朝日新聞においては、「みくにの汽車」について「汽車の進行が旋律となって節々に織り込まれ」¹³、両曲について「明朗闊達のうち到我が躍進鉄道を象徴した旋律によつて綴られてゐる」¹⁴と喧伝されているが、この二曲は上記の明快な「ぴょんこ節」を利用して汽車が走ってゆく様子を描写し、勇ましい汽車の姿を印象付けようという理念の下で作

⁹ 辻田前掲書,p.39

¹⁰ 小村前掲書,p.176

¹¹ 團伊玖磨(1999)『私の日本音楽史』,NHK ライブラリー,p.199

¹² 小村前掲書,p.176

¹³ 『朝日新聞』1942年11月11日

¹⁴ 『朝日新聞』1942年11月10日

曲されたという側面があることが伺える。

また、「海の底さへ汽車は行く」については歌詞部分すべてが七音からなる西洋音階の第四音(ファ)と第七音(シ)が抜けた「ヨナ抜き音階」になっており¹⁵、「御国の汽車(躍進鉄道歌)」についても第四音が二回、第七音が一回登場する以外はすべて「ヨナ抜き音階」になっている¹⁶。堀内敬三著『定本日本の軍歌』に収録されている長調でつくられた曲のうち七音からなる西洋音階の長調でつくられた曲は4曲だけであり、ほかは「ヨナ抜き長音階」もしくはそれに一音加えた六音からなる曲である¹⁷ことから、両曲は戦時中に良く歌われた曲に共通する性質を持っている。

以上のように、この公募によりできた「みくにの汽車(躍進鉄道歌)」、「海の底さへ汽車は行く」の両曲は、関門トンネル開通を誇示し、戦意をかきたてる内容の歌詞を持つのみならず、日本人にとって親しみやすいリズムと音階を持ち、戦時中の人々を惹きつける効果を持っていたと考えられる。

¹⁵ 譜面は『朝日新聞』1942年11月11日による

¹⁶ 譜面は『朝日新聞』1942年11月10日による

¹⁷ 小村(2011),p.172